

萱

2021・5

風萱集

亀田虎童子

マスクして己れいさめる春の宵
鳴く田螺鳴かぬ田螺の見分け方
むさし野の味と思ひて町蒜摘む
肝試しほどの吊橋春の山
食つて寝て老いてたまさか蚯蚓鳴く

松下 道臣

小春日や一日分を充電す
とろみ剤薬にまぶす冬至の日
十二月八日のケトルけたたまし
消しゴムの滓のたまりし十二月
年忘れ顔面筋をゆるくして

小島 良子

泳ぎ着けさうなところに春の島
永き日や広場をひとり横切りて
空瓶のもたれ合ひたる暮春かな
見えてゐて遠きポストや春の昼
駅駅に階段多し卒業期

出牛 進

春なれやくつさめ二つ三つ四つ
分度器で計りしことも春日差
老人は遅寝早起き春うらら
春雨の音の間遠を寝に付きぬ
井戸ありし頃のふるさと藪椿



萱集

進選

蒼天の一樹の花の傘の下
東京 飯塚トシ子

春の鴨ちよつこと雄の争いぬ
春の鴨五つ六つは昼寝かな
羽繕い明日は発つやに残る鴨
風光る今ここに居る小合溜

「君が代」を唄ふ少年風光る
東京 加倉井たけ子

春うらら李朝の壺のつやめける
臥龍梅咲き残りたる冠木門
大石を挟みて木々の芽吹きたる
どの像も吾に破顔の気楽坊

東日本大震災

三・一一十年目の日は吟行だった
東京 菅原 朋子

山門の屋根浮きて納まる帝釈天
マスクして黙禱をする三・一一
春雷や通り過ぎたる夕影色
暗闇を火の粉舞い散るお水取り

あたたかき青敷く海へ花の束
霧れり艇庫に錆びし鎖鍵
四万まん十川の千の菜の花山けぶる
名前見ゆ小さき肩へ春シヨール
一菜の膳にあつあつ浅蜷汁
東京 武田 未有

お転婆も三児のママに花杏
「おやすみ」と納む難に声かけて
記念樹のミモザ見守る悲喜こもこも
老いの手にもピンクのネイル春の宵
「平柳田中記念館」
千葉 中山 惠子

田中翁のつぎぬ情熱牡丹の芽
春暁や登あおと音静かに小提灯
ほろほろと夕日の落ちて蜆汁
春なれや立ち漕ぎ行かむ神楽坂
初蝶や遠きところに命ある
散りてなほ苔むす梅のありどころ
東京 根來 隆元

のどかさやこのごろ君も物忘れ
啓蟄や月に一度の医昔通ひ
防災の無線流るる日永かな
地震十年仏花となりぬ雫柳
春めくや無精吹つ切れサツチング
東京 ふなかわのりひと

自習室 現代の俳句を読む

小島良子

夕陽を楽器のように背負う秋 安西 篤

角川俳句年鑑 二〇二一

吟行の帰りに南池袋を歩いていたら、近くの東京音楽大学の学生さんに出会った。大きな楽器ケースを肩から負っていたが、あの大きさはチェロだな、と気付いた。バイオリン属の弦楽器は、バイオリン・ビオラ・チェロ・コントラバスと大型になるほど音域が低くなる。両膝の間に抱えるように弾くチェロは、落ち着いた柔らかな音色である。池袋の夕空に静かな音楽が聞こえるような気持ちになった。

掲句は見事な秋の夕陽であろう。楽器のように背負うという受け取り方に感じ入る。何か敬虔な思いも漂い、氏がこれまでに背負ってこられたもの大きさにも思い至る。

背後から交響曲のアダージオが響いてくるように

ある。

秋夕焼ひとりアカペラ反戦歌 篤

ひとりとあるからには、移ろいやすい秋夕焼に誘われてふと口遊まれたのであろう。氏も戦中戦後の苦しい時代を抜けてこられた筈である。日中戦争から太平洋戦争敗戦へとなだれ込むその間に、「愛国行進曲」「天に代りて不義を討つ」「同期の桜」など多くの曲が作られた。国威発揚、戦意高揚、皇国史観推進を指すようなそれらの歌は、七十六年経た今も、不意に心に浮かぶ痛烈な反戦歌である。

氏は、どのような反戦歌を歌われたのであろうか。

だれも影もたずに歩くカフカの忌 酒井弘司

現代俳句年鑑 二〇二一

若い人達の読む外国文学といえば、カミュ、カフカ、サルトルという時代があったと思う。ユダヤ人の商家に生まれたカフカは結核で早世したと言われる。彼は死に際し友人のプロートに、書き遺したものの凡て焼却するよう頼んだというが、そのプロートによつて著作は出版された。生前も支持者はあったものの、カフカの名が広く知られ、二十世紀の文学界に衝撃を与えたのは、死後のことであつた。

カフカの作は、何かのきつかけで事実が揺らぎ出し、日常の景が反転するようなものが多く、胸を衝かれる。

掲句の影を持たない人達は、現代に通じる不安と自己疎外を適確に示すものと思う。

六月のかもめを抱いてくる少年 弘司
鷗と少年となると

百合鷗少年をさし出しにゆく 飯島晴子
を思う。晴子氏の少年は、壊れやすい感受性を表しているとするれば、掲句の少年は虚と実のあわいを歩いて来る清々しい少年である。六月の鷗は冬翅から夏翅に変わり、しつとりした空気に包まれている。その白さは少年の心そのものであるうか。東京湾から隅田川に沿って駒形橋あたりまで上つて来る百合鷗は、時に猛々しく美しい。